

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】 林 明仁

【所属】 東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻

【研究題目】

軍備管理・軍縮における NGO アドボカシーネットワークの内的環境

【研究の目的】

国際政治学におけるこれまでの NGO に関する研究では、NGO の活動を促進させる外部条件を論じるもの、あるいは NGO による規範の構築と伝播(=規範起業家)を論じるものが主流であった。しかし、異なる NGO が同様の外的な環境に置かれても、同様の行動をとるわけではない。NGO が効果的な活動を展開するには、NGO 自体の組織や戦略の作り方などの内的環境の整備が必要であり、NGO を分析する際にはこの視点を踏まえない限り、影響力を行使するプロセスの正確な分析はできない。そこで本研究では、NGO のネットワークが、取り巻く環境の変化に応じてネットワークの組織的改編、戦略の再考を重ねつつ、さまざまな制約を乗り越える様態を明らかにすることで、NGO の内部的な環境と活動の結果の関係について考察し、内的環境の重要性とそのあり方を指摘することを目的とする。

【研究の内容・方法】

本研究では、事例として 3 つの軍備管理・軍縮分野(対人地雷・クラスター爆弾、小型武器、劣化ウラン兵器)における NGO ネットワークを扱い、NGO の影響力が大きいと考えられてきた対人地雷・クラスター爆弾の分野における NGO ネットワークと、相対的に成果を残していない小型武器と劣化ウラン兵器の NGO ネットワークの内的環境の比較を行なうことで、特定の外的環境に置かれた NGO ネットワークの協力体制の構築のあり方という内部環境と活動の結果の関係について検討を行なった。

NGO ネットワークの内部環境を分析するにあたり、それぞれのネットワークの「協力密度」および「メンバーシップ」の 2 つの視点から考察を行なった。「協力密度」は、ネットワークの機能としての情報や戦略、行動の共有、同一の事務局の設立などネットワークの統一性に関わる視点である。また、「メンバーシップ」はネットワークの構成メンバーや意思決定のメンバーの数、地域、属性に関する視点である。NGO ネットワークが効果的に影響力を発揮するには、世界的な規模で統一的なアドボカシー活動を展開する必要がある。それを可能にする要因が、ネットワークの動きの統一性を強めるための「協力密度」の高さ、地理的、分野的に多様性に富んだ「メンバーシップ」である。

本研究では、上記の視点から研究を進めるために、それぞれの NGO ネットワークの事務局があるヨーロッパにおいて事務局での資料収集(会議資料、調査報告書、ニュースレター等)および関係者へのインタビューを行なった。特に、ネットワークを構成する団体とのコミュニケーションを担当する事務局スタッフへのインタビューを通じて、ネットワークの運用状況を中心に聞き取り調査を行なった。

【結論・考察】

収集した資料や関係者へのインタビューを通して、上記の視点から 3 つの NGO ネットワークの分析を行なった結果、対人地雷・クラスター爆弾の NGO ネットワークでは「協力密度」が高く、「メンバーシップ」が地理的にも分野的にも多様性に富んでいることが確認された。他方で、小型武器の NGO ネットワークは「協力密度」が低く、また劣化ウラン兵器の NGO ネットワークは「メンバーシップ」の多様性に欠けていることが確認された。このことにより、対人地雷・クラスター爆弾の NGO ネットワークは世界的な規模で統一的なアドボカシー活動が可能になり、条約形成に向けた強い影響力が行使できた一方で、小型武器および劣化ウラン兵器の NGO ネットワークは、アドボカシー活動の焦点が分散したり、地理的に多様な国で活動が行なえず影響力が限定的になったと考えられる。この調査結果は、既存の NGO 研究が重視してきた NGO

の外的環境や形成を試みる規範の妥当性以外の視点を NGO 研究に提示するものである。すなわち、NGO のアドボカシー活動の成否を検討するにあたり、効果的に活動を展開するための NGO ネットワークの内部的な環境にも焦点をあてる必要性を示している。

